

《 批 評 》

「精選」に名を借りた新たな「暗記」用語の提案の問題点

—高大連携歴史教育研究会編「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）」の「世界史」領域案について、特に中国明代を事例として—

鈴木 正弘

はじめに

高大連携歴史教育研究会編「高等学校教科書および大学入試における歴史系用語精選の提案（第一次）」（2017年10月）（以下「精選の提案」と略称する）を拝見した¹。入試での「必須暗記事項」を示すもので、「考える楽しみを味わえる科目」になるという。基本的に、歴史教科書本文に使用してよい用語に縛りを掛けようとしているものとみる²。一応の基準らしきものを示してはいるが、個々の用語について見ると、採択か、不採択か、理由がはっきりしない。「精選」の名に値するような選び方をしているのだろうか、との疑念を感じた。また「新しい」歴史の見方、捉え方の「キーワード」を加えている。改めて確認するほどのことではないと思っただが「精選」の意味を確認すると、「えりぬく」ことであるという³。加えてしまっただけでは「精選」ではない。つまり「精選」というのは偽りと言わざるを得ない。副題を「歴史系用語」とし、「歴史用語」の「精選」としていないのもよく考えなければならない点である。

高大連携歴史教育研究会運営委員会は、「用語精選の議論が具体的な形で進むきっかけになることを願ってのもです」（「高等学校の歴史教科書用語と歴史系大学入試の出題用語に関する調査へのご協力のお願い」⁴）と述べている。疑念を感じる点もある⁵。しかし評者も「用語精選の議論が具体的な形で進む」ことを望む。ここでは「精選の提案」の問題点をきちんと把握するように努めたい。評者の疑問に「具体的な形で」応答して欲しい。本批評では、まず作業の全体統轄者の一人である桃木至朗氏の見解から「精選の提案」の企図の問題点を探り、その上で「精選の提案」の観点を検討し、特に「世界史」領域の中国明代に絞って検討を加えたい。

I. 桃木至朗氏の新聞インタビュー等に示された見解に対する要望

桃木至朗「歴史「覚える」から「考える」へ 高校教科書、用語の精選案提言 桃木至朗・大阪大教授に聞く」に接した⁶。桃木氏は、副会長の一人で、運営委員長。歴史系用語精選の全体統轄者の一人である。「精選の提案」作成の中心人物であり、その見解を確認しておくことは、「精選の提案」を検討する上で必要なことと考える。

1. なぜ採録されたのか、なぜ削除されたのか、

桃木氏は「坂本龍馬や吉田松陰、クレオパトラが用語のリスト案から削られ」たことについて、「これらの人名は小説やドラマでも有名で、小中学校段階で既に親しんでいる」と述べている。これは理由にならない。坂本龍馬とクレオパトラの名前ぐらいは知っているだろうが史実に基づく歴史上の意義を理解しているとは思えない。まして吉田松陰を知っているとは思えない。さらに言うと、「精選の提案」は「人名はできる限り削減する方向」という基準であり、「既に親しんでいる」か「未だ親しんでいない」か、という基準はない。桃木氏の説明通りだ

とすると採録されている者は「未だ親しんでいない」者ということになる。

桃木氏は続けて、

小中学校は人物を重視して日本史を学ぶが、高校は世界史、日本史とも偉人伝より、歴史の流れや社会の構造の変化を学習する。人名や事件名はその手がかりだ。そこで、小中で学んだ知識や、歴史を大きく動かしたわけではない人名、事件名は大胆に削った。

と述べ、「人名や事件名」、つまり過去の人々の営為を「歴史の流れや社会の構造の変化を学習する」ためのキーワードとするような歴史教育を提唱する。また、これまで前提とされていなかった「小中で学んだ知識」は、どのように把握しているのか、少なくとも削除した経緯を明らかにする必要がある⁷。特に「人名、事件名」を「歴史を大きく動かしたわけではない」という評価基準によって排除したとしていることは看過しがたい。「歴史を……動かす」ことについて、「大きく」か否かを如何なる基準で判断するのか、明らかにすることを求める。

2. 本文で扱う用語とそれ以外の用語の違い

桃木氏は、「今回の案は教科書の本文で扱って全員が覚え、入試で知識を問う最低限の用語のリストだ」と述べる。「暗記科目」批判から始まった一連の動きは、より強力な「全員が覚え」ねばならない用語の選定へと向かったのである。桃木氏は「覚える用語を絞り込」んだという。さらに「教科書の本文以外の資料や図版、コラム、注などの部分でいろいろな用語を使うこと」を「否定しているわけではない」という。一見すると、今までとは少し違うが、コラムや註などで記載できる。大勢としては変わらないと思わせようとしているようにみえる。しかしこれまでとはまったく違う。桃木氏は「入試で知識を問う以外の形式で取り上げることを否定しているわけではない」と述べる。つまり「入試で知識を問う形式で取り上げることを否定している」ということ、本文に載らなければ、「入試で知識を問う」対象にはならないということである。

加えて「歴史の流れや社会の構造の変化を学習する」中では、過去の人々の具体的営為は等閑視されて行かざるをえない。桃木氏は「覚える用語を絞り込むことで、逆に多様な取り上げ方が可能になる」と述べる。何が「逆」で、どのような「多様な取り上げ方」が可能なのか判然としないが、このような形で「覚える用語を絞り込」むならば、歴史知識の空洞化を招くであろう。桃木氏は「理系の歴史離れは特に深刻だ」と現状を憂える。桃木氏の言うように「17世紀の危機」や「小氷期」の語を示せば「理系も食いつく」とは思えない。疑念を感じるが⁸、理系の歴史歴史離れに配慮していたら、史実に基づいた「用語」を聞いたこともない文系学生を大量に生み出した、ということになるのではなだろうか。

3. 歴史用語とは言い難い独自の価値観に引きつけた「概念」用語「現代」用語等の加筆

桃木氏は、

従来は用語だと考えられていなかった「史料批判」「ジェンダー」などの概念や、「難民」「気候変動」など現代の理解に必要な用語を加えた。／例えば16～17世紀の世界史、日本史では、新大陸の征服者や英独の王名、戦国大名の名前や合戦の羅列をやめた。代わりに世界を動かした日本産などの「銀」や、16世紀の銀による好景気が幕を閉じ、経済や社会の混乱が続いた「17世紀の危機」、

その背景となった「小氷期」など理系も食いつく用語を加えた。

と述べる。「史料批判」「ジェンダー」「難民」「気候変動」「銀」「17世紀の危機」「小氷期」等を歴史用語とすることは妥当では無い。副題に「歴史系用語」と記し、「歴史用語」とない理由であろう。こうしたことは曖昧にすべきでない。純粋な「歴史用語」はどれであるかを示すべきである。

また「用語の精選」を称しつつ、「現代の理解に必要」という根拠不明の主観を以て用語を増加させることは、歴史教科書を歴史以外のものに変えていくことになる。先の「歴史を大きく動かした」という表現と類似して気になるのは、「代わりに世界を動かした日本産などの「銀」と記していることである。「銀」が「世界を動かした」は修辭的には用いることはあるにしても、歴史叙述ではない。「銀」を用い、大小の程度は措くとして、時代を動かしたのは人間である。人間が人間の世界を動かしているのである。

4. 強制力が無ければ何をやってもよいのか

桃木氏は、多数のマスコミ取材を受けて、「ある種のまとめ」として「坂本龍馬を高校歴史教科書に載せる意味は？」を公表している⁹。新聞記事よりも自身の考えを明確に出している箇所もあるので、併せて検討しておこう。

桃木氏は、

…(略)…物語、偉人伝などの文脈で強調されてきたが実際に歴史を動かしたかどうか疑問な人物や事件は、削る対象になる。参考資料や考察対象としてそれらを取り上げるのは差し支えないが、それが実際に歴史を動かした人や事件、大きな歴史の変動などと比べて優先されるのは(時間が足りない中では)完全に間違っている。

という。そもそも「実際に歴史を動かした人や事件」と「実際に歴史を動かしたかどうか疑問な人物や事件」とをどのように選別しているのだろうか。大小の程度は措くとして、「実際に歴史を動かして」いない「人や事件」は存在しないであろう。また歴史学では史実は批判的に検証するものであり、「疑問」をもたれない「人物や事件」はない。桃木氏の論法は、「歴史を動かした」「歴史の変動」の大小の評価の問題に過ぎない。「完全に間違っている」と断言できるのだから、大小の判別について、公正明確な基準を設けているのであろう。その基準を示していただきたい¹⁰。なお、「物語、偉人伝などの文脈」において、歴史を動かしたとされているのであれば、そうした物語・偉人伝が存在する事実は軽んじるべきではない。

桃木氏は、

坂本龍馬がなぜない、ガリレオ・ガリレイはなぜ切られた、と騒ぎ立てるのは、ここまでの前提を理解したうえでやっていただきたい。そうすれば、「復活折衝」の余地も生じてくるだろう。

と結ぶ。要するに「ここまでの前提を理解」していない人物の意見は聞かないということである¹¹。それならば、何故アンケートをしたり、意見を求めるのだろうか。「高等学校の歴史教科書用語と歴史系大学入試の出題用語に関する調査へのご協力をお願い」でも、そのように記すべきではないか。理解しないで「ここまでの前提を理解」していない人物が意見を記してしまうだろう。そもそも「ここまでの前提を理解」するように求めるのならば、しっかりと「ここまでの前提」を示すべきである。評者は「復活折衝」に応じてほしいというのではない。「復

「精選」に名を借りた新たな「暗記」用語の提案の問題点(鈴木)

活折衝」に応じて頂かなくても結構なので、何故採用したのか、何故排除したのかを個々のケースについて、具体的にうかがいたいだけのことである¹²。

桃木氏は、

歴史理解には歴史観がからむので、だれかが強制力のある用語リストを作ったらそれは「思想統制」に当たるからである。われわれのリストもあくまで民間団体が自主的に作ったもので、強制力はまったくない。

と述べる。そうだろうか。学術会議を背景としてやってきたことの延長線上にあることである。「強制力はまったくない」といえるだろうか。強制力はないが、影響力を拡大させようとしているし、それは強制につながって行く。「最後に今後」では、

- 2) その後、まずは私大入試や国公立二次試験、2020年度に始まる大学入試センターの新型入試などでこのリストを参考にしてくれるよう働きかける。
- 3) 同時に、2022年度から実施される高校新科目「歴史総合」「世界史探究」「日本史探究」の教科書編集の参考になるよう、用語リストの振り分け・組み替えを行う。

と述べる。要するに「強制力はまったくない」が「働きかける」という。働きかける相手は、まず、入試を主管する大学であり、ついで新しい教科書編集の主体、つまり出版社や執筆者ということになろう。こうした関係者に直接圧力をかけて流れを作ろうということなのだろう。こうした手法に問題を感じないのだろうか。これまでも教科書の採択をめぐる、様々な教育機関に圧力があつた。これからは、出版社や教科書の執筆者に対しても「強制力はまったくない」組織や個人から様々な働きかけをしてよいということである。教科書の執筆者である桃木氏は、こうしたことを率先して行うことをどのように考えているのだろうか。見解をうかがいたいものである¹³。

◇ ◇ ◇

桃木氏の発言は、「精選の提案」の本音の部分垣間見せる。改めて掲げると、桃木氏は、

ここまでの前提を理解したうえでやっていただきたい。そうすれば、「復活折衝」の余地も生じてくるだろう。

と述べている。こうした発言を「上から目線」と言うのである。歴史の叙述の仕方には、多様な形式がある。しかし、多くの場合、過去に対する評価の問題を孕んでいる。したがって、歴史家は、史実に対して謙虚であることを求められる。「精選の提案」に欠けるのは、歴史を叙述する者としての史実に対する謙虚さではあるまいか。

II. 用語精選の観点をめぐって

前節で見た桃木至朗氏の見解は、かなり多くの問題を胚胎している。ただ「精選の提案」は、桃木氏を中心とするものではあるが共同作業をへてなったものである。内容について、別に検討を加えなければならないだろう。

1) 用語精選の意義： 用語精選について、次のように記している。

なお、こうした用語精選に対しては、入試問題が作れなくなる、高校教育や教科書執筆における自

主性を束縛することになる、という2つの懸念がしばしば聞かれます。①入試の出題については資料を深く読ませる、概念的・論理的思考を要求するなどのノウハウの蓄積が求められます。また授業内容や教科書執筆全体については、本用語精選案が②リスト外の用語を、授業中に例示することや教科書の資料・図表やコラムなどに掲載することを否定してはいる点を、よくよくご理解いただきたいと思います。③精選(制限)を提案しているのは、「教科書本文に掲載し、入試で必須暗記事項として扱う」用語だけです。(p.4) ※丸数字、ゴシック体、アンダーラインは評者。以下同じ

「精選」は「制限」のことであるとし、ここで選ばれた用語は、「教科書本文に掲載」され、「入試で必須暗記事項として扱う」用語になるという。また別に「出題用語」(p.4)としている箇所もあり、大学入試と絡めていることは明確である。加えて「リスト外の用語」を「教科書の資料・図表やコラムなどに掲載することを否定しない」とも述べており、入試で出題することも否定していないように見える。スカスカの本文に膨大な「資料・図表やコラム」という形式となるのであろうか¹⁴。入試について、資料を深く読ませる、概念的・論理的思考を要求するとしている。「資料を深く読ませる、概念的・論理的思考を要求する」問題を作ることは可能だと思う¹⁵。しかし現状の高校生の実態、世界史教師の実態、大学での問題作成担当者の実態を勘案すると、どの程度行うことができるのだろうかと考えてしまう¹⁶。そもそも「概念的・論理的思考」を要求することが中等段階の歴史教育において主要なことだろうか。評者には必ずしもそうは思えない¹⁷。

2) 用語精選の原則： 以下のように、用語精選の原則を示している。

- 第一の原則：ほとんどすべての教科書に記載されている用語を選び出す。
- 第二の原則：現代的課題を考える上で必要な歴史用語やそれを理解するための歴史や社会に関する諸概念を重視する。
- 第三の原則：基軸的な用語（概念用語）を中心として、その基軸的な用語を説明する上で必要不可欠な事実を示す用語を選定する。

この内、第一の原則は作業の手順としては理解できる。第二の原則は大いに問題がある。「現代的課題」を如何に抽出したのか、そして種々の「課題」の内、何を如何なる基準で選んだのか、そして、それを「考える上で必要」なものが何かを如何に明らかにしたのか。この論証過程が示されないのであれば、主観に基づいたことを弥縫する表現でしかない。更に「歴史や社会に関する諸概念」を重視し、史実を重視するとしめないことも、問題を有しているように感じる。特に問題を感じるのは第三の原則で、

この第二、第三の原則に関連して、従来必ずしも「用語」と見なされていないが新しい歴史教育に必要と考えられる**概念や物質名などの語句**が一定数あるので、それは従来の教科書に全く出ていないもの、少数の教科書にしか書かれていないものなども積極的に取り入れました。そこでは、「**一般常識**」に属する語彙であって、**学習や入試に必要なではあるが高校教科書の本文に用語として掲載することにはなじまないタイプの用語も、あえてリストアップしました**ので、その部分はやや性格が違っていることをお断りしておきます（後掲「1. 歴史の基礎概念」で掲げた用語にはそのタイプが多い）。環境・災害の歴史など、従来の教科書では軽視されているが今後の新科目などでは**確実に重視すべきだと思われる分野の用語**も同様です。(pp. 4-5)

と述べている。「概念や物質名などの語句」「一般常識」に属する語彙」とは何か。「1. 歴史の基礎概念 (192語)」を見ると、「a. 歴史の基礎用語」は、「歴史、文学、哲学、世界史、… (略)…」と始まっており、「b. 歴史の主なテーマ」には、ジェンダー、コミュニケーション、アイデンティティー等の語を含んでいる。また「c. 時代・地域を越えた歴史のキーワード」には、

小麦、トウモロコシ、銅、銀等の語を含んでいる。評者はこうした語を歴史用語というとは思えない。こうした語をなぜ「暗記」しなければならないのだろうか。さらに「確実に重視すべきだと思われる分野の用語」とは何か。「確実に」なのに、推測なのか。どのような根拠に基づいているのか明らかにしていただきたい。

3) 用語精選の基準： 「用語精選案の精選基準と区分・配列方法」では、「A. 選定する用語の基準」「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」に分けて基準を示す。「A. 選定する用語の基準」は、以下のようである。

[1]

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
政治体制や社会経済を叙述する上で必要と判断したもの	<u>人名はできる限り削減する方向とする。</u>

「政治体制や社会経済を叙述する上で必要と判断したもの」は選定するというのだが、「人名はできる限り削減する」という。政治体制には、人名は付きものではなかろうか。少し前に授業でやったウィーン体制下のフランスのことが頭をよぎり確認した。「復古王政」も「ルイ18世」「シャルル10世」も、まったく出ていなかった。「ウィーン体制」「ウィーン会議」の語はあるのだが、「メッテルニヒ」も「タレーラン」も「正統主義」も出ていなかった。出ているのは「四国同盟」「勢力均衡(バランス・オブ・パワー)」だけであった。なぜ「四国同盟」が出ている「正統主義」が出ないのか。「必要と判断した」基準は何か。

なお「立憲王政」も「ルイ=フィリップ」もまったく記述はない。「二月革命」のところを見ると、「ルイ=ナポレオン(ナポレオン3世)」とある。「第二共和政」も「第二帝政」もない。「第二共和政」では「ルイ=ナポレオン」。「第二帝政」となって「ナポレオン3世」となる。「ルイ=ナポレオン(ナポレオン3世)」では「政治体制」に配慮しているとはいえない。そもそも、歴史学は、個別具体的、一回性の史実を追求する学であり、歴史学の成果を反映した歴史教育も同様の傾向を有さざるをえない面がある。歴史上の登場人物が少なれば一般論になってしまう。

[2]

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
文化史用語について…宗教・主義思想・人物・作品・建造物・○○時代 <u>「文化は社会の鑑である」という考え、文化の政治性を考慮して、当時の社会が見えるもの、社会や世相を代表するもの、現代社会に通じるものを精選し必要最低限の用語を残す。</u> また、世界遺産についても配慮する。	膨大な文化史用語の削減 <u>時代別・分野ごとに機械的に用語を入れていくことはやめる。1人の人物に対して作品名は、現代にも人口に膾炙したもの、社会への影響などを考慮して絞っていく(できる限り1人物1作品まで)。</u> その他の事象・建造物についても 必要最低限・代表的なもの だけに絞り込む。

「文化は社会の鑑である」とは、どのような文脈で提起された言葉なのだろうか。評者は寡聞にして知らなかった。さらに「文化の政治性」を考慮するという。そして「当時の社会が見えるもの」「社会や世相を代表するもの」「現代社会に通じるもの」を「必要最低限」残すという。これは「文化道具主義」とでもいうべき考え方で、文化史を社会史、政治史の補助ぐらいにしか考えず、独自の価値を認めない発想である。「世界史」を何のために学ぶのか、というそもそも論にまで遡って議論しないと噛み合わないのかもしれない。文化史的内容は世界史の白眉ともいうべきもので、表にすれば良いとか、コラムにすれば良いと言うことではなく、本

文として、どのように叙述するかを、考えねばならないと思う。

たとえば、「イタリア=ルネサンス」では、「ダンテ/ マキャヴェリ/レオナルド=ダ=ヴィンチ/ミケランジェロ」を掲げる。なぜ「ボッカチオ」を掲げないのか。「文化は社会の鑑である」という考え、文化の政治性を考慮して、当時の社会が見えるもの、社会や世相を代表するもの、現代社会に通じるものを精選」というのなら、外せないではないか。また絵画では「ボッティチェリ」を掲げないのはなぜか。「文化は社会の鑑である」という考え、文化の政治性を考慮して、当時の社会が見えるもの、社会や世相を代表するもの、現代社会に通じるものを精選」というのなら、外せないではないか。

さらにいえば、ルネサンスの三大画家の内、なぜラ=ファエルロだけを外したのか。理由がわからない。別の言い方をすると、なぜ「レオナルド=ダ=ヴィンチ」と「ミケランジェロ」の二名は採録されたのか。理由がわからない。

また、芸術においては、世相を代表するものだけが大事なのでは無いし、現代社会に通じるものだから大事だとも言えない。「時代別・分野ごとに機械的に用語を入れていくこと」をやめるといふ趣旨がわからない。「できる限り1人物1作品まで」というような基準の立て方こそ「機械的」なのではないだろうか。「できる限り」というので例外を認めるようであるがレオナルド=ダ=ヴィンチやシェークスピアはどうするのだろうか。「四大悲劇」というから四つ挙げなければならないので、一つだけ現代に通じている「オセロ」を挙げるのだろうか。歴史と言うことだと「ジュリアス=シーザー」もあるし「ベニスの商人」も大事である。そうなるコラム、主題学習か。なお、確認したが「レオナルド=ダ=ヴィンチ」「シェークスピア」は挙げられていたが両者の作品は挙げられていなかった。作品としては絵画は一点も挙げられていなかった。文学作品は『ドン=キホーテ』と『ユートピア』を掲げている。なぜこの二作品なのか。『カンタベリー物語』も『愚神礼讃』も『パンタグリユエル物語』もないのはなぜか。掲げられている基準そのものも問題であるが、個々の採録の基準はさらに問題を孕んでいるように感じる。どのようにしてこうした判断になったのか、きちんと説明していただきたい。

[3]

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
	<p>人口に膾炙している用語、高校歴史用語として定着しているものであっても、近年の研究で評価が変化し、適切ではないまたは重要ではないと判断された用語は削除したり置き換えを行うものとする。外国の名辞で片仮名表記や訳語が不適切もしくはいたずらに難解だったものも、やはり置き換えを行う。</p> <p>例) 「貞観の治」「開元の治」「タラス河畔の戦い」「守護大名」「惣無事令」「討幕の密勅」→削除「ギリシア正教会」→「正教会」に置き換える。「贖宥状」→免罪符に戻す</p>

評者は「人口に膾炙している用語」を縦横に使って構想した方が生徒の興味・関心を喚起できて良いように思う。そもそも「近年の研究」の「評価」にあまり引きずられるべきではない。「近年」であるか否かを基準にしてはならない。適切な研究の成果を踏まえるべきであり、古くても適切であれば採り、近年のものでも適切でなければ棄てる必要がある。「評価」も同様である。定評のある研究と評価に基づいて構想すべきで、教科書もしかりである。

例として「貞観の治」「開元の治」を挙げていることに疑問を感じる。「貞観の治」といえば、呉兢撰『貞観政要』であり、日本の為政者にも多くの影響を与えた書である。「世界史と日本史の関連用語や接点となる用語は入れていく」という方針ならば、当然入れなければならないだろう。なお確認したところ『貞観政要』の語も出ていなかった。「貞観の治」を語らなければ

ば『貞観政要』だけ語るのは無理だろう。また「開元の治」から「天宝の悪政」への変化が見所なのに、「開元の治」を「政治体制や社会経済を叙述する上で必要」と判断しない理由が知りたい。「貞観の治」は、『貞観政要』から来るやや誇大なイメージがあるようである。しかし「開元の治」を否定する論でもあるのだろうか。天宝年間を語らなければ、文学における「初唐」「盛唐」「中唐」「晩唐」の区分を語ることもできず、古典の教養として問題を生ずるではないか。「近年の研究で評価が変化し、適切ではないまたは重要ではないと判断された用語」とあり、この例示では、まず「近年の研究」の「評価」の妥当性を検証する必用がある。依拠した研究を示していただかなければ検証できない。

また「ギリシア正教会」を「正教会」と訂正するという。「正教会」には、「ロシア正教会」や「アルメニア正教会」等複数の「正教会」があるのではないか。「ギリシア正教会」は正しくないかもしれないが間違いというほどなのか。そうでなければ、これまで通りの方が混乱しないのではないか。

先に「日本史」領域を扱わないとしたが、「守護大名」の語を削るという。評者は、近年日本史領域の授業を担当しておらず、議論も存じない。しかし「守護大名」の語に何か適切でない点があるのだろうか。この語は、概念用語の範疇かもしれない。「守護大名」の語を用いなくて室町幕府をどのように叙述するのだろうか。しかしこうした用語を削除すると、相当削るものがあるだろう。さらに言えば、新たに加える概念用語「キーワード」なども削ることになるのではないだろうか。いずれにしても、依拠する「近年の研究」の「評価」の妥当性を検証する必用がある。「日本史」領域は、「世界史」よりも研究成果と教科書叙述が連動しており、授業においても論じる必要性がある。また「惣無事令」については、議論の分かれる点があるようである。ただし高校の歴史の授業では、時代相を把握するのに有効な語として扱われており、消すとすると、某かの具体的史実を示していかないと、時代相の把握に困難を来すように感じる。また、こうした用語を消すのなら、「概念用語」と称している物はほとんど消えるのではないだろうか。この点も、きちんと判断の根拠を示していただきたい。

[4]

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
歴史上必要な地理的用語(地域名、首都名、政治的・軍事的・社会経済に関する叙述に必要な地名)	従来の各教科書で出てきた歴史学説で使用されている用語や地域を表す用語の中で、 地理科目との整合性を考慮し 、共通した適切な叙述と用語に置き換えたり、削除を行う。 例)「胡漢融合国家」「拓跋国家」「中央ユーラシア」

「歴史上必要な地理的用語」を採録するという。また「地理科目との整合性を考慮」という。「世界史」は歴史地理科の一科目ということを考えてときに、妥当な見解のように見える。実は「世界史」の体系は、深い地理的洞察のもとに構築されるべきものであり、大小の地理空間把握を踏まえてなされるべきものである。そうした観点からの「地理」の尊重であるべきであり、単に地名を入れる、用語を整合させるということが重要なのではない。また単に地理で行っているような現代音に近づけるというのならば熟慮すべき点がある。歴史における中国の地名等の発音表記は、当時の音を尊重する慣用音によっている場合が多い。こうしたことは、歴史領域において、地理について付度しているだけではだめで、地理の領域ときちんと対話してすり合わせるべき事柄である。

また、後掲「第1部会世界史用語精選 第一次案 作業ファイル」の「世界史」明代部分の表を見ると「南京(金陵)/10/金陵は不要」とする。都市の雅名はその都市のある一面を現している。すべてを大事とは思わないが機械的に一つにするようなことの無いように検討すべきで

ある。たとえば現在の「瀋陽」は、かつて「奉天」といった。歴史であれば「奉天」という歴史地名を無視して叙述するべきではない。

〔5〕

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
	<p>〇〇の廃止・〇〇遠征・〇〇へ出兵・〇〇独立というような表現のものは、「〇〇を廃止した」「〇〇に遠征した」など書けばよいので、原則として、もとの〇〇と別の用語としてカウントはしない。</p> <p>例) 「<u>ナントの勅令廃止</u>」(←<u>ナントの勅令(王令)</u>)、「<u>高句麗遠征</u>」(←<u>高句麗</u>)、「<u>台湾出兵</u>」(←<u>台湾</u>)、「<u>ビザンツ帝国の滅亡</u>」(←<u>ビザンツ帝国</u>)、「<u>科挙廃止</u>」(←<u>科挙</u>)、「<u>南北朝の合体</u>」(←<u>南北朝</u>)</p>

「〇〇の廃止・〇〇遠征・〇〇へ出兵・〇〇独立というような表現のものは、「〇〇を廃止した」「〇〇に遠征した」など書けばよいので、原則として、もとの〇〇と別の用語としてカウントはしない」という。カウントしなければ用語の見た目の数は増えない。しかしそれは精選の基準ではなく、計数の基準である。カウントするかないかではなく、掲げられている例は、重要なことが多いので、叙述されねばならない。例として掲げられている「ナントの勅令廃止」の意義は重要である。ブルボン朝を生み出した「ナントの勅令」をなぜ廃止しなければならないのか。ここに思いが至らないルイ13世・ルイ14世史は、話しとして表層的に流れる。掲げられている例は、いずれも歴史上の重要性に鑑み用語のように扱われているものである。教科書では「ナントの勅令を廃止した」と記しても、参考書や授業の板書、授業プリントでは、「ナントの勅令廃止」と記されていくであろう。

〔6〕

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
	<p>同じ語句からの派生語がある場合や、事象について複数の呼び方が教科書に掲載されているような場合は、なるべく別々にカウントはせず、必要に応じてそれらを併記する。</p> <p>例) 「<u>奴隷(奴隷制)</u>」「<u>現生人類(ホモ=サピエンス)</u>」「<u>綿布(綿織物)</u>」</p>

「なるべく別々にカウントはせず、必要に応じてそれらを併記」した例に、先に掲げた「ルイ=ナポレオン(ナポレオン3世)」がある。前述したように、しっかり叙述して欲しい。掲げられている例では、「奴隷」と「奴隷制」とは違う。何も「奴隷(奴隷制)」としなければならないものとは思われない。また「現生人類(ホモ=サピエンス)」には「新人」という呼称もある。用語例を見ると「現生人類(新人, ホモ=サピエンス)」となっていたので一安心。高校生の場合は、覚えやすい方がよいので、評者だと「新人(現生人類, ホモ=サピエンス)」となる。こうした事柄は、叙述の中で語記にも配慮して妥当性を検討して行くべきである。

〔7〕

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
<p>現代社会に通じる事項はできる限り入れる</p> <p>「歴史総合」との関連</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界史と日本史の関連用語や接点となる用語は入れていく。 ・最現代史に必要な概念用語を取り入れる。 	

「現代に通じる」ではなく、「現代社会に通じる」としている点が気に掛かる。何故か。「歴史総合」を視野に置いて、「世界史と日本史の関連用語や接点となる用語」に配慮するの

つの見識であろう。ただそのようにするならば、抜け落ちている事項・人物が多いように感じる。例えば中国に渡った人たち、日本に渡ってきた人たちの事跡を取り上げていない。

「最現代史」は、歴史学の手法では、特に難しい点があり、他の教科・科目、たとえば政治経済や地理も任せの方がよい。第16章「現在の世界」に「概念用語」に相当する「キーワード」が多数掲げられている。これを本文に叙述して「暗記」させるとすると、かなり具体的に記さねばならないであろうから、用語の暗記ではなく、内容の暗記へと続いていくのではないだろうか。具体的な叙述を示してもらいたい。

[8]

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
グローバルな視点、公民科の教養との関連用語 →概念用語の採用	

「公民科の教養」は、公民科に任せて、「地理歴史科の教養」を考えた方がよいのではないだろうか。「概念用語」を出せば、説明しないわけにはいかないだろう。これを本文にどのように叙述するのだろうか。

[9]

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
一般用語について説明で用語としないものと 用語として残すものを逐次検討する。	

「歴史用語」の問題ではなく、叙述内容のことである。「一般用語」は、どのようにしても「一般用語」で、「歴史用語」にはならない。「ジャガイモ」が「歴史用語」なら、あらゆるものは「歴史用語」である。そもそも暗記するようなことではない。こうした「一般用語」は、内容の暗記を伴うこととなると考える。

[10]

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
単元を越えて重複する用語の扱いは、なるべく 叙述で用語増加を抑えるものとする。	

単元を越えて重複しても必要ならその都度記しておいた方が良さそうに思われるものもある。たとえば「産業革命」の語は、必用において用いざるを得ず、叙述で押さえるわけにはいかないだろう。そもそも「産業革命」の語が複数箇所に出てきたとしても用語の「増加」とは言わないだろう。

[11]

「A. 選定する用語の基準」	「B 削減したり置き換えたりする用語の基準」
ジェンダーに関する用語について家族制度、宗族、婚姻、性別による社会生活上の役割などについては概念用語を用い、後は叙述で行うものとする。	

ジェンダーに関して「家族制度、宗族、婚姻、性別による社会生活上の役割など」を「概念用語を用い」て論じるという。用語をみると「母系制」「主婦」「良妻賢母」「女性参政権」「女性の社会進出」「フェミニズム(女性解放運動)」等の語を挙げており、個別具体的な史実に基づく「歴史」というよりも、「概論」のようなものをイメージする。またジェンダーというよりも「女性学」の延長線上にあるもののようにも見える。どのような叙述になるのか注視したい。

ジェンダー、性差の社会的機能を授業で取り上げることは、現状の教師の力量では十分でない点がある。評者は授業において、中国における「家」に関する動向の中で、女性の役割について一定程度話している。そのことが無いと女性の社会的役割を語ることができないからである。思うに、そうしたことを話せる高校教師は他にいないのであり、当然定期考査にも出ないし、入試にも出ない前提である。

評者は、教科書の体系の中で、ジェンダーについて、どの程度叙述できるのかという疑問がある。そして、何でも教科書に記すべきだとも思わない。評者の見解は素朴なもので、女性をもっと教科書に登場させるべきだと考えている。登場する女性をみると、「則天武后（武則天）」「卑弥呼」「ジャンヌ=ダルク」「エリザベス1世」「マリア=テレジア」「エカチェリーナ2世」「ヴィクトリア女王」「サッチャー」である。男性についても人名を絞っているのに、女性も政治上の重要人物に限られるのは仕方ないということになるのであろうか。一方、採録されない人物がいる。政治史の範疇で考えると、プトレマイオス朝エジプト最後の女王「クレオパトラ」が出てこない。「マリア=テレジア」だけでは「女性の外交」は語れないだろう。少なくとも「ポンパドール夫人」を出し、註にロシアの「エリザヴェータ女帝」を出すべきだと思う。「外交革命」の語はあるのだが、成果ともいえるべき「マリー=アントワネット」が出てこない。フランス革命をどう叙述するのだろうか。評者の授業だと、「エリザヴェータ女帝」や「エカチェリーナ2世」の評価を切り口に、背後にあるロシアの皇女達の境遇、彼女たちを操る大貴族の存在などに触れるようにしている。そのことが男性の皇帝の理解に繋がると考えている。評者は、女性達の記述を体系的に見直す必要があるように感じる。少なくとも、ここに採否の理由を明示して欲しい。

〔12〕

「A. 選定する用語の基準」	「B. 削減したり置き換えたりする用語の基準」
概念用語や物（産物や商品）の名前の積極的導入	

考え方の相違と言うことになろうけれども、歴史の主人公は「人間」。個別具体的な「出来事」。人間の悪戦苦闘を軽視して、「概念用語や物（産物や商品）の名前の積極的導入」をして、覚えさせることに何か意味があるのだろうか。これも具体的な内容の暗記を求めることになろう。

〔13〕

「A. 選定する用語の基準」	「B. 削減したり置き換えたりする用語の基準」
環境史に関する用語について、気候変動・自然災害(水害・気候による災害・火山噴火)・人災・疫病など歴史への影響を考慮して厳選して入れていく。	

「環境史に関する用語」とは何か。十分理解した上で記しているのだろうか。たとえば「原子力発電」という項目に「核の平和利用」とある。これは一般的に言えば「原子力の平和利用」の誤りであろう。原子力平和利用国際会議はあるが核平和利用国際会議はない。「原子力発電」という項目であることを考えれば、「相対性理論」や「量子力学」は用語として採用されているのだから「原子力発電」の技術史を記すべきである。しかし、そうしたものはない。代わりに事故事例が3件。今回の精選の趣旨に従うならば1件に絞られるべきものではないか。さらに世界史上の事例としてはチェルノブイリの原発事故を採るべきであろう。標榜する「精選」は行っているのか極めて疑問を感じる。さらに平和利用というなら、医療・産業での利用の記

述が無いのも不思議である。前述の通り、桃木氏は「理系も食いつく用語を加えた」という。そもそも歴史や人文・社会系の学びを積み重ねてきた教師が、付け焼き刃の半可通の知識で教えて良いものかどうか、評者は疑念に感じる。そうしたことは、理科や政治経済に任せたらよいではない。また高大連携の観点からいえば、新しい潮流に飛びつくのは大学に任せた方がよいのでは無いだろうか。

◇ ◇ ◇

歴史は個別具体的な個性追求の学である。人名を削り、文化史を削り、一方で「概念用語や物(産物や商品)の名前の積極的導入」を目指すという。人名や文化に関する用語を削減して、概念用語で語っても歴史らしい面白い授業になるとは思えない。まして、半可通の「理系も食いつく用語」を取り上げても、きちんとした歴史は語れず、混乱するばかりではなかろうか。

Ⅱ. 「第1部会世界史用語精選 第一次案 作業ファイル」の「世界史」明代部分に対する私見

「第1部会世界史用語精選 第一次案 作業ファイル」の「世界史」明代部分の表は、『新課程用 世界史B用語集』(山川出版社、2004)を基礎に、三段階の作業をへて作成されたもので、第一次が鳥越・小川案、ついで矢部案を作成し、それを踏まえてWG案を確定している。すべてを一覧できるようになっているが、ここでは、やや煩瑣であり、前二者の成果は割愛して掲載する。全体的にWG案は矢部案を踏まえており¹⁸、参考にすべき点があるが、矢部案に触れているのは、直接論及がある場合のみとしている。この表に評者の私見を加えてみよう¹⁹。

WG案	番号	用語/頻度/精選理由	評者私見
○	2683	明/11/14世紀の危機 元末へ	
	2684	紅巾の乱/11/14世紀の危機 元末へ	
	2685	白蓮教/6/元末へ	なぜ宋代ではないのか?
○	2686	朱元璋(洪武帝・太祖)/ 11/洪武帝・太祖は不要	「一世一元の制」が大事なら「洪武帝」は必用なのではないか。また人名を出来る限り削除するというのなら、朱元璋も不要となるのではないか。削除できない理由は何かを示すべき。
○	2687	一世一元の制/7/日本の元号との関係	
○	2688	南京(金陵)/10/金陵は不要	「南京」の必要な理由を示すべきである。
○	2689	六部〔明〕/10/皇帝への直属化として重要	この三つは、一体的に押さえるべきではないか。／中書省・丞相は廃止されたが、後に内閣大学士がおかれる、というのがポイント。「宰相」は「制」なのだろうか。また「制」とすると、どこで「成立」したのだろうか。
	2690	中書省廃止/10/明の国家の性質を叙述	
	2691	宰相制廃止/4/明の国家の性質を叙述	
	2692	明律(大明律)/8/明の国家の性質を叙述	
	2693	明令(大明令)/8/明の国家の性質を叙述	
	2694	軍戸/8/明の国家の性質を叙述	兵制の基本は、押さえておくべきだろう。軍戸の語を用いずにどう国家の性格を叙述するのか。制度は採用するのではなかったのか。
	2695	衛所制/11/明の国家の性質を叙述	
	2696	五軍都督府/2/細かい	
	2697	都察院/1/細かい	
	2698	民戸/6/明の国家の性質を叙述	
	2699	匠戸/2/明の国家の性質を叙述	
	2700	里甲制/11/明の国家の性質を叙述	明の地域把握の周到さを知ることので

	2701	賦役黄冊/11/説明で	きるもので、基本的に残しておいたほう
	2702	魚鱗図冊/11/説明で	がよいであろう。「均田」等土地制度
○	2703	六諭/11/後世への影響 モデル	を採用するなら、なぜ採用しないのか。
	2704	里老人/3/細かい	一貫性欠く。
	2705	建文帝(恵帝)/7/人名削減	「説明で」とのこと。「君側の難を靖
	2704	靖難の役/8/事件名を入れて用語を増やさない、説明で	んずる」ことを名目として挙兵し」と記すと、結局、「甥の建文帝を打倒したのです」「これを「靖難の役」というのです」と解説してしまいそうな気がする。叙述を見てみたい。
	2707	燕王朱棣/4/永楽帝のみでよい	靖難の変以前に永楽帝であろうはずはない。「朱棣」はともかく「燕王」として後の北京に拠っていったことが重要。
○	2708	永楽帝(成祖)/11/明の画期	「冊封」は採用するのに、王・皇帝の関係を示す事例をとらない理由が分からない。
○	2709	北平(北京)/11/北平は不要	「北平(北京)」という記し方は、「燕王」と記すのなら妥当である。「燕王」と記さない場合に、どのような叙述になるのか。見てみたい。明には複数の「北京」があった。「北平」も「北京」とされるのであって、「北京」があらかじめ存在したものではない。
○	2710	内閣[中国]/3/現代政治へ通じる	「現代政治へ通じる」のは名称のみで、
○	2711	内閣大学士/6/内閣のみでよい	現代政治におけるキャビネット(内閣)と票擬を行う内閣のシステムは全く異なる。事実上の宰相職である「内閣大学士」に触れなければその差異を描けない。
	2712	モンゴル遠征/11/用語としない	そもそも用語とはいえない。
	2716	朝貢貿易/10/「海禁=朝貢体制」とする※なぜ?	朝貢貿易と朝貢体制は異なる。体制というほどのものなのだろうか。
	2717	冊封体制/5/ここでは不要	むしろ、ここで必要。研究史を理解しているのだろうか。
	2718	北虜南倭/10/明側の評価で一面的表現 説明で	「明側の評価で一面的表現」かもしれないが、削除する理由になるのだろうか。また「明側」とはどのような意味か。
	2719	北元/8/矢部案(モンゴルの北方後退いう表現でよい) 通り	上記の理由とも関連するが、中国側の通称を排除するということになると、倭寇の消えない理由がわからない。また北元は、「当時の明の状況叙述に必要」ではないのか。
	2720	正統帝(英宗)/8/人名削減	
	2721	韃靼(タタール)/10 韃靼/タタール共に不適 モンゴルとして地図へ	オイラト部とタタール部をごちゃまぜにしたら、モンゴルの動向がわからなくなるのではないか。加えてエセン=ハン、アルタン=ハンを削って、「北虜」をなかったことにしてしまっただろうか。なお、タタール部については、事実上モンゴルを指す場合がある。叙述において注意すべき点であろう。
	2722	エセン=ハン/8/人名削減	
	2723	土木堡/4/細かい	
	2724	土木の変/9/叙述で	
	2725	オイラト(瓦剌)/11/地図で示す	
	2726	アルタン=ハン/7/人名削減	
○	2727	倭寇/11/当時の明の状況叙述に必要	「総合」を視野に置くのなら、前期倭寇と後期倭寇を分けて考えるのが見識のように思う。また倭寇を明・中国側の視点として書き改めないのはなぜか。
	2728	前期倭寇/3/倭寇のみでよい	
	2729	後期倭寇/4/倭寇のみでよい	

	2730	万暦帝(神宗)/5/人名削減するがこの時代の叙述は必要	「嘉靖・万暦」を叙述するなら、「張居正」は避けて通れないように思う。／一世一元を採用するなら、「この時代」は「万暦」と表現されるのであって、当然皇帝は万暦帝。敢えて皇帝名を用いない理由が分からない。(万暦)赤絵については「図版で」とある。名前を出した方がわかりやすいと思う。／暗記しなくても良いが名前は出す、という結果になるのだろう。叙述を見たい。
	2731	宦官/7/既出	
	2732	張居正/7/人名削減	
	2733	顧憲成/5/人名削減	「東林派」は政治史において重要なだけでなく、当時の世相を論じる上で重要。誰か一人と言えは顧憲成だろう。なお評者は、ここで趙南星を話している。入試には「絶対出ない」前提である。
	2734	東林書院/5/細かい	
	2735	東林派/8/細かい	
	2736	非東林派/3/細かい	
	2737	魏忠賢/[参考]/人名削減	
	2738	万里の長城修築/8/用語としない	そもそも用語とはいえない。
	2739	崇禎帝(毅宗)/2/人名削減	
	2740	李自成/11/人名削減	「李自成」の名を削るということは、易姓革命時に現れる農民反乱の首謀者の名も削ることになる。例えば「黄巢」も削るのか。加えて「李自成」の名がなければ、「呉三桂」を説明しにくく、「三藩の乱」も説明しづらい。
	2741	ツングース/3/既出	
○	2742	女真(女直・満州人)/11/ 矢部案(既出であるが清朝の民族を示す用語として必要) 通り	
	2743	建州部/6/細かい	
○	2744	マンジュ(満州〈満洲〉)/6/満州→満洲で	当時の表記で統一するというのなら、一つの見識である。他の表記も統一されているだろうか。また「満州」という表記を是とする教科書執筆者もいるようなので、現状では、執筆者に任せべきことかもしれない。
○	2745	ヌルハチ(太祖)/11/建国者	なぜ不要でないのか。理由を示すべきである。「人名削除」ではないのか。
	2746	後金(金)/10/叙述で	王朝名を用語とせず叙述できるのだろうか。
	2747	アイシン(金)/2/不要	女真族だから、氏は不要とはならないのではないか。愛新覚羅という姓は、女真族でもっともよく知られているもの。復姓の代表的なものであるとともに、愛新覚羅溥儀は重要人名。
○	2748	八旗/11/清朝の重要用語	なぜ「重要」と考えるのかを示すべきであろう。それによって、他の用語の扱いも変わってくるように感じる。
	2749	旗人/4/細かい	
	2750	旗地/3/細かい	
	2751	満州八旗/5/八旗で叙述	
	2752	蒙古八旗/5/八旗で叙述	
	2753	漢軍八旗/5/八旗で叙述	
○	2754	緑營/7/叙述で	
○	2755	太宗(ホンタイジ)/10/事績も重要	なぜ「重要」と考えるのかを示すべきだろう。
	2756	チャハル部/5/矢部案(内モンゴルの部族平定という表現でよい) 通り	チャハルは、内モンゴル以外の地域も含む。チャハル部はホンタイジ時には満洲地域にも及んでいる。チャハルと

			しか表現できないからチャハルなのである。
	2757	「湖広熟すれば天下足る」/6/叙述で	生産をめぐる変化等を考える上で必用。どう叙述しても、諺を記すよりわかりにくくなるのではないか。
○	2758	メキシコ銀/11/銀の重要性・世界性	
	2759	馬蹄銀/3/図版で	
	2760	日本銀/10/銀の重要性・世界性	日本との繋がり、世界遺産、共に重要ではないか。
○	2761	一条鞭法/11/正確な叙述とともに	異論は無いが、他の用語でも「正確な叙述」は必要なのではないか。
	2762	客商/1/細かい	
	2763	蘇州/3/地図で	
	2764	杭州/3/地図で	
	2765	新安(徽州)商人/10/国際的に活躍した商人の説明	「会館・公所」を出すなら「新安(徽州)商人」・「山西商人」も必用ではないか。
	2766	山西商人/10/国際的に活躍した商人の説明	また「国際的に活躍した商人の説明」とはどういうことか。基本的に国内での商業に従事したのではないか。
○	2767	会館・公所/9/現代に通じる	景德鎮は、宋代の地名。
○	2768	景德鎮/9/宋代よりむしろ明代以降で	「郷紳」は、地方有力者には違いない。
	2769	郷紳[中国]/5/地方有力者という表現で一般化	漢以来出てきた「豪族」とは違う。宋代の「形勢戸」とも違う。後の「郷勇」などの説明にも繋がる。用語としてあった方がよいように思う。
	2770	華僑/3/概念用語へ	
	2771	民変/1/細かい	
	2772	奴変/1/細かい	
	2773	城居地主/1/細かい	用語はともかく「細かい」と否定してしまうのはどうか。抗租や明清社会を説明するのに必用か、不要かという基準からの判断となるべきではないか。叙述を見てみたい。
	2774	佃戸/5/小農の説明で	佃戸は小農ではない。そもそも「小農」という微妙な「用語」を増やす意味は那邊にあるのか。「小農」とは何かを説明する必要が生じることをどう考えるか。何を説明するのか叙述を見てみたい。
	2775	抗租運動/7/小作料への抵抗運動という説明で	小作料自体に抵抗するのではなく、その不適當な徴収や、付加小作料に対する抵抗である。
○	2776	朱子学/10/重複になるがこの单元でも重要	
	2777	王陽明(王守仁)/9/人名削減	王陽明(王守仁)を削って陽明学だけ残されても困るのではないか。なお「日本への影響」を理由として陽明学を採用するというのは不適切。日本の受容は変質している。
○	2778	陽明学/10/日本への影響	
	2779	心即理/1/倫理へ	倫理でやるだろうが、歴史でも社会を考える立場から触れなければならないと思う。
	2780	知行合一/10/倫理へ	
	2781	致良知/3/倫理へ	
	2782	李贄(李卓吾)/3/人名削減	
○	2783	『永楽大典』/9/文化史上重要	『永楽大典』は重要だとして、『四書大全』『五經大全』『性理大全』は大事でないのだろうか。「朱子学」について「この单元でも重要」と述べているが。
	2784	『四書大全』/6/書名削減	
	2785	『五經大全』/5/書名削減	
	2786	『性理大全』/2/書名削減	

「精選」に名を借りた新たな「暗記」用語の提案の問題点(鈴木)

	2787	黄宗羲/3/人名削減	考証学を「文化史上重要」というのなら、黄宗羲、顧炎武は出したくなる。どちらか一人とは行かないのではないか。	
	2788	顧炎武/4/人名削減		
○	2789	考証学/5/文化史上重要		
	2790	実学(経世致用の学)/6/説明で		
	2791	『農政全書』/8/書名削減		
	2792	徐光啓/10/人名削減		
	2793	『本草綱目』/9/書名削減		
	2794	李時珍/7/人名削減		
	2795	『天工開物』/10/書名削減		
	2796	宋応星/8/人名削減		
	2797	『崇禎曆書』/6/書名削減	「実学(経世致用の学)」を説明するのに、『農政全書』も『本草綱目』も『天工開物』も『崇禎曆書』も削ってしまっ、どう説明するのだろうか。叙述を検討して見たい。	
○	2798	『水滸伝』/8/人口に膾炙 現代にも読者		
○	2799	『三国志演義』/7/人口に膾炙 現代にも読者		
○	2800	『西遊記』/7/人口に膾炙 現代にも読者		
	2801	『金瓶梅』/7/書名削減		
	2802	四大奇書/3/この言葉があるから四つ用語が増える		
	2803	『今古奇観』/1/細かい		
	2804	『牡丹亭還魂記』/1/細かい		
	2805	文人画/1/矢部案(文化史表)通り		
	2806	南宗画(南画)/2/矢部案(文化史表)通り		
	2807	董其昌/3/人名削減	「四大奇書」という言葉があるから用語が増える。だから削るとするのは、暴論ではないか。明末の状況を考える際に重要な『金瓶梅』を削って何を教えるのだろうか。『金瓶梅』がわからなければ、清代の『紅樓夢』も意味づけられないだろう。一方で、膾炙しているから不要、としないのはなぜか。一貫性がない。この論法なら坂本龍馬は復活させるべきである。	
	2808	院体画/1/矢部案(文化史表)通り		
	2809	北宗画(北画)/2/矢部案(文化史表)通り		
	2810	仇英/2/人名削減		
	2811	染付/4/図版で作成技術の説明を		
	2812	赤絵/6/図版で作成技術の説明を		
				文化は「表」に、ということのようである。ただ、なにもない本文の叙述はどのようになるのだろうか。見てみたい。
			作成技術よりも鑑賞を重視しては如何か。	

「世界史用語」として選定された用語は次のようである。

第7章 アジア諸地域の繁栄(102語)

キーワード				
	c. 時代・地域を越えた歴史のキーワード	d. 近世までで個々の時代・地域を越えるキーワード(42語)(1(c)に挙げたものは省略)	f. 各章のキーワード	キーワード以外の用語
	銀/アジア間貿易	近世/大航海時代(大交易時代)/小中華/17世紀の危機	倭寇/海禁=朝貢体制/「鎖国」/勤勉革命/「貧困の共有」/華僑・華人	
明・清時代と東アジア・東南アジア：明の盛衰				
明の成立				明/朱元璋(洪武帝)/一世一元の制/南京/六部の直轄化/六論
明の発展		朝貢貿易/冊封	海禁=朝貢体制	永楽帝/鄭和/北京/内閣
明の衰退			倭寇	
明の滅亡				

明清時代の社会と経済(内明代)				
経済	銀/綿花/綿織物/ 茶/アジア間貿易/ トウモロコシ/陶 磁器		〔銀〕〔アジア 間貿易〕	一条鞭法/景德鎮/会館・公所/生糸/ サツマイモ/メキシコ銀
社会	地主/小作人		勤勉革命/貧困 の共有	
明清時代の文化				
明の 文化				朱子学/陽明学/「永樂大典」/『水 滸伝』/『三国志演義』/『西遊記』

既存の用語集の用語から選んだものだけではなく、評者のよく存じない新しい歴史の見方、捉え方からキーワードを補い、体系づけようとしているように見える。そうした新しい歴史の見方、捉え方によるキーワードをゴシック体としてみた。全体に見て、交易史を中心とした把握の試みであり、明の成立、滅亡には、キーワードは無く、「明の発展」のキーワードは「海禁＝朝貢体制」であり、「明の衰退」のキーワードは「倭寇」である。明は「倭寇」で衰退・滅亡したとは思えない。これらの語の「必要」を如何に説明するのだろうか。「精選の提案」の用語を使って、どのような叙述になるのかを見てみたいものである。

評者の既存の授業プリントにおいて、どのような内容を含み、どのような内容を削られるのかを確認してみた。評者の見るところでは、少なくとも「郷紳」「北虜南倭」「万曆」(万曆帝・張居正・東林党)「湖広熟すれば天下足る」「王守仁」「実学」「オイラート/エセン=ハン」「タートル/アルタン=ハン」『金瓶梅』等は本文にあるべきではないか。

おわりに—何が問題か—

「世界史」未履修問題を「暗記科目」批判にすり替えた歴史教育改変の動きは²⁰、高大連携歴史教育研究会へと進み、「精選の提案」に到達した。そもそも語記の機能と意義とを検討せずにきて、今更「全員が覚え」なければならない、などということがどうして出てくるのか。

「入試で必須暗記事項として扱う」用語とのことであったが、語記するようなものとは思えない、歴史用語とも思えないものを多く含んでいることを指摘した。たとえば「キーワード」の中の「17世紀の危機」「海禁＝朝貢体制」「勤勉革命」「貧困の共有」という語を覚えさせることに意義があるのだろうか。こうした語は、時代の見方、捉え方でしかない。また「銀」「綿花」「茶」「トウモロコシ」「サツマイモ」「綿織物」「陶磁器」「地主」「小作人」は歴史用語であろうか。誰もが基本的に知っていてしかるべきもので、一般用語としておくべきではないか。

明代史に関する用語の扱いを検討してきて感じたことは、率直に言って、歴史用語の機能をきちんと理解しているのだろうかという不安である。「郷紳」「佃戸」といえば歴史用語であり、「地主」「小作人」とするならば、歴史用語に数えるべきではない。筆者には「郷紳」は「地主」の一員ではあっても、「地主」と同じものとは思えない。「小農」という微妙な意味を含む用語を用いる意味も理解できない。

また「北京」は歴史用語であろうか。こうしたものは地名というのではないか。北京が「北平」と呼ばれていたことを重視すれば、歴史地名ということになる。こうした時代の息吹の感じられる用語を一方的に削ることで「面白い歴史教育」になるとは思えない。「四大奇書」という言葉があるから用語が増えるという。だから三つでよいという。まさか「三大奇書」とは言わないだろう。やっちはいけないことである。一方で「精選」といいながら、新たに「キ

ワード」を付け加えて、関係する「概念用語」を増やしていく。これでは「精選」とはいえない。また「人口に膾炙している用語」でも、「近年の研究で評価が変化」したとして、「削除したり置き換え」たりするという。「近年の研究」には妥当でないものも少なからず存在し、古い研究でもしっかりしたものもある。したがって、根拠を示さなければ、妥当性を検証できない。

そもそも用語の精選とは、叙述を離れて存在するものではない。特に、歴史教科書の本文は、体系的叙述を求められる。こうしたやり方で、教科書本文の叙述に「制限」を加え、叙述内容を特定の方向に導こうというのは、精選の考え方とは相容れないものと言わざるを得ない。

評者は重要なことだと考えているのは、「精選の提案」の目的である。出題する大学、教科書を出版する出版社、教科書の執筆者に対して、第三者の立場で、強制はしなけれども働きかけるといふ。こうした圧力のかけ方でよいのだろうか。「精選の提案」は、教科書に対して、さらには歴史教育に対して、「学習指導要領」に並ぶ、もう一つの基準を作り上げようとしているように見えるのである。教科書というものは、本来、執筆者の識見によって、自由に執筆されるべきものではないだろうか。評者は、教科書を執筆する立場にない。しかし教科書を執筆する側にいる方々は、こうしたやり方を肯定的に捉えることができるのだろうか。意見をうかがいたいものである。

最後に「歴史総合」について一言しておきたい。桃木氏は「「歴史総合」…(略)…の教科書編集の参考になるよう、用語リストの振り分け・組み替えを行う」と述べている。「日本史」は「世界史」とは違い、緩やかに学術と陸続きの構造をなしている。「歴史総合」を構築する際に、「世界史」の発想で「統合」あるいは「接合」しようとしてもよいものにはならない。別の所でも引用したのであるが、評者には上原専祿氏の

…(略)…日本史の現実をつきつめていき、掘り下げていけば、日本史的現実と密着して当然考慮しなければならないだけの世界史的現実というものが、視野の中に入ってくるのではないか。こうなれば、それ以上のことをやる必要は何もない。日本史というものがひとつあり、それとちがった次元、あるいはちがったところに世界史というものがある、という見方に立って、その二つをどう結びつけたらいいか、その両者の交渉をどう考えたらいいかということを問題にすべきではないのであって、日本史的現実を掘り下げていくと世界史的現実とぶつかっていく、それを研究のなかで消化し、教育の面で消化していくということではいいのではないか。そういうぐあいに考えられはしないかと思うのであります。(「世界史と日本史との統一的把握の問題」『歴史意識に立つ教育』国土社、1958、『季刊歴史教育』7、1957より転載、pp. 209-210)

という記述が印象深く記憶されている。安易な「精選の提案」をもって「歴史総合」に取り組むのはよいことではない。グローバルな覆いを日本史にもかけるような統合ならやめた方がよい。「日本史的現実」を掘り下げていくと立ち現れるような「世界史的現実」を構想していたきたいものである。(2018. 1. 26)

1 www.kodairen.u-ryukyu.ac.jp/pdf/selection_plan_2017.pdf。

2 大学入試について次のような見解を披瀝している。

大学入試は、受験生が高等学校で身に付けた基本的な知識や能力が大学入学に相応しい水準に達しているかを判定するものであります。その際、大学入試には公平性の確保が重要であり、特定の教科書にしか載っていないかったり、全くどの教科書にも載っていない用語や記述を知識として問うことは、この公平性の原則に反する行為と言わざるをえません。(p. 4)

大学側は、高等学校の事情をどこまで勘案しているか疑念に感じるときがある。公平性を尊重しているとも思えない。難関大学は難問を出さなければ差がつかないだろうし、学生募集で苦戦している

大学は「相応しい水準」も何もないだろう。受験知に特化した予備校が、現役生をターゲットにしている時代に、言っていることが錯誤しているのではいか。これでは受験の公平のために、教科書の内容をそろえろと言っているのと同じで、教科書の多様性も保持されない。入試のために教科書があるのでは無いことを確認しなければならないだろう。

- 3 『広辞苑』では「多くの中から特にすぐれたものをよりすぐること。えりぬき。よりぬき」とし、『大漢和辞典』では「厳密に選ぶ。又、えりぬきのもの。詳選。妙選。」とし、いずれにしても付け加える意味は無い。
- 4 http://www.kodairen.u-ryukyuu.ac.jp/pdf/questionnaire_request_2017%E3%80%80.pdf.
- 5 2017（平成29）年11月付けの文書で、「今後、来年2月末までに上記のアンケート調査を行い、その結果に基づいて用語精選の最終案の作成に進みたいと考えております」と述べている。評者が気づいたのは12月になってからである。常人の力では、三ヶ月内外で検討するのは、まず難しい内容と思う。このような短期間しか検討の期間をおかず、寄せられた意見に基づき議論の機会も設けず、いきなり「最終案の作成に進みたい」というのでは、「議論が具体的な形で進むきっかけ」にはなり得ないのではないか。記している内容に矛盾を感じないのであろうか。
- 6 朝日新聞デジタル、2017.12.2、<http://digital.asahi.com/articles/DA3S13255015.html?requesturl=articles/DA3S13255015.html>。
- 7 拙評「『歴史基礎』は何処に向かうのか—久保亨「高校歴史教育の見直しと『歴史基礎』案」と油井大三郎「歴史的思考力の育成と高大連携」に対する疑念—」（『教育社会史史料研究』9、2015）は、久保亨「高校歴史教育の見直しと『歴史基礎』案」と油井大三郎「歴史的思考力の育成と高大連携」（『歴史評論』781、2015.5）を検討したもの。久保氏は「小中学校の社会科教科書の中における歴史に関する記述は、率直に言って、大学関係者の議論の中では十分に意識されてこなかった」（p.49）と述べ、さらに「高校歴史教科書の執筆に関わる大学教員はある程度存在するのに対し、小中学校の社会科教科書の執筆に直接関わる大学教員は少ないという事情も存在している。後述する高校歴史教育研究会の報告書では、すでに小中学校の歴史教科書における用語問題が分析されているので、今後、学術会議の審議の中でも検討を深めるべき課題の一つになるであろう」（pp.49-50）と述べている。評者は、こうした記述に不信感を表明している。その後、小中学校の社会科教科書における歴史に関する記述を検討したのだとすると、その成果も公表していただきたいものである。
- 8 「理系の歴史離れ」ならびに理系の学ぶべき歴史知識については、きちんとした議論が必用である。このような形で出てくるのは唐突に感じる。きちんとした見解を示していただきたい。
- 9 「ダオ・チーランのブログ・パシフィック」<http://daiviet.blog55.fc2.com/blog-entry-1915.html>。
- 10 「高校歴史用語に『従軍慰安婦』教科書向け精選案『南京大虐殺』も」（『産経ニュース』2017.12.3、<http://www.sankei.com/life/news/171203/lif1712030008-n1.html>）は、「軍による『強制連行』の誤解を与えかねない『従軍慰安婦』や、存否などで論争のある『南京大虐殺』も入った」と疑問を呈しており、理由を図りかねている。「研究会は年度内の最終案とりまとめに向け、ウェブサイトでアンケートを実施中で、油井氏は『調査に予断を与えかねない』として、個別の精選基準に関するコメントを控えた」と見解を紹介している。個別の精選基準を明示せずにアンケートを実施すること自体に問題がある。もっと議論を重ねるべきなのに、基本的な情報を秘したアンケートに何の意味も見いだし得ないと考えないところに、根深い問題がある。
- 11 桃木至朗氏の排他的な対応に危惧の念を抱く方は、他にもおられるようである。インターネットで拝見したところ、whomoro氏の指摘は冷静で的確である。桃木氏はwhomoro氏の『市民のための世界史』の書評に対して、『『市民のための世界史』への書評に感謝（一部修正）』（「ダオ・チーランのブログ・パシフィック」2014.8.29、<http://daiviet.blog55.fc2.com/blog-entry-1276.html>）を記す。これに対してwhomoro氏は、「残念なことですが、ブログの文章に流れているのは、『阪大歴教研での長い議論の歴史を知らない人にはわからないだろう』という考え方のようです。『阪大歴教研での長い議論の歴史を知らない者の批判は受けつけない』という口吻を感じてしまいます。書評の冒頭で述べた通り、私は阪大歴教研の活動を多少は存じ上げているつもりですが、まさか全国の大学生や市民に『阪大歴教研での長い議論の歴史を知って読め』と要求するわけではないでしょう。もっと開かれた姿勢が必要だと思います。万が一にも、意見表明の自由を封ずるようなセクショナリズムに陥ってはなりません」（『『市民のための世界史』の書評に対する桃木至朗さんの反論について』（whomoro「世界史の扉をあけると」2014-11-13、<http://d.hatena.ne.jp/whomoro/20141113/1415843977>）と記している。桃木氏の排他性は、独特の階層認識に拠っているらしく、この点をwhomoro氏は、「極めて残念だったことを述べねばなりません。高大連携を進めているはずの桃木さんが、『学部卒の教員＝理解力のない教員』と決めつけ、強い言葉で非難していたのです。（大学の研究者—大学院卒の高校教員—学部卒の高校教員）という序列を前提とし、それを強化するような発言でした。世界史教育をめぐる根深い問題（研究者の権威主義）が露呈していたと言わざるをえません。高大連携の双方向性は、考えられていないのです」（whomoro「世界史教育と教科書・研究者〈シンポジウムが映し出したもの〉」（『世界史教育と研究者』（『世界史の扉をあけると』2015-03-05、<http://d.hatena.ne.jp/whomoro/20150305/1425549326>）と述べている。評者も桃木氏の志向に疑念を感じ、

高大連携を「優秀」な大学側、研究者の側(厳密には「研究職」のことか)から見て、「優秀」ではない高校側、教育者の側へと、ある種の伝達技能向上の場のように構想しているのならば、考え違いではないだろうか。そもそも研究者は「優秀」だから研究者なのだろうか。こうした発想の根源には「優秀な学生」の進路としての「本当に優秀」な研究者と、「本当に優秀」でない「残りの研究者」の成れの果てとしての大学の教育者、「本当に優秀」でも「優秀」でもない脱落者としての「高校教員」という三区分別が伏流している。(拙評「歴史教師は「歴史総合」に向けてどのようにあるべきか—角田将士・桃木至朗・原田智仁の各氏による歴史教育関連論説に対する疑問と私見—」『教育社会史史料研究』11、2017)

と記している。このように壁を設けて、上下の関係の中で理論構築したのでは、広く胸襟を開くことはできないであろう。さらに「ここまでの前提を理解」しないのならば騒ぐなど言われれば、多くの教員は口を挟めないだろう。これでは、高大連携と言いながら、多くの高校教員の本音は耳に届かないのではないだろうか。

- 12 日本史領域では、「坂本龍馬」が教科書から消えると報じられ、関係者の悲憤の声がマスコミを通じて伝わってきた。評者の関わる「広瀬淡窓」ならびに「咸宜園」も同様の扱いである。日本遺産となり、世界遺産を目指す日本の教育史上に意義のみとめられた漢学塾を切り捨て、どうして「歴史総合」に向かうことができるのか説明していただきたい気持ちである。評者は、淡窓研究会の事務局長として、緊急に、以下のような見解を表明しておいた。

2017. 12. 14

高大連携歴史教育研究会様

淡窓研究会
事務局長 向野正弘

当会は、基盤創設より50年、日田の廣瀬史料館・淡窓会・咸宜園教育研究センターと連携しつつ、日本の教育を見つめてきた研究団体です。聞く所によると、貴会では、「実際に歴史を動かしたかどうか疑問な人物や事件は、削る対象になる」(桃木氏の発言：<http://daiviet.blog55.fc2.com/blog-entry-1915.html>)という方針によって「広瀬淡窓」と「咸宜園」とを「日本史」教科書の本文から削除するとのこと、大変驚いております。意見を求められているとのことで、いくつかの点を確認させていただき、また一応の意見を申し上げたいと存じます。

1. 確認したい事項

- 1) 「広瀬淡窓」と「咸宜園」を削除した理由を教えてください。
- 2) 「漢学」に対する認識を教えてください。ちなみに用語案は次のようです。
蘭学 蘭学 (d, e)、杉田玄白、『解体新書』、平賀源内
国学 国学 (d, e)、本居宣長、塙保己一、尊王論、頼山陽
儒学 朱子学 (d, e)、藩校 (e)、郷学
教育と思想 心学、石田梅岩、寺子屋 (e)、安藤昌益、通俗道德 (e)
- 3) 「日本遺産」に対する認識をうかがいたい。

2. 意見

広瀬淡窓の咸宜園は、近代教育に繋がる「学びの主体」を養成した漢学塾である。身分に依らない開かれた実力主義の私塾であり、5千の門下生は、幕末から近代にかけて広く活躍している。また漢学は、明治維新の教育を解明するキーワードとして重要であり、「漢学 漢学、広瀬淡窓、咸宜園」として取り上げるべきものである。漢学は、明治以後の日清・日朝の交流でも重要な意義を有し、「歴史総合」を構想する際にも等閑に付すべきものではない。当然、本文に記されるべきものである。

また「咸宜園跡(大分県日田市)」は、平成27年4月24日に、「旧弘道館(茨城県水戸市)」「足利学校跡(栃木県足利市)」「旧閑谷学校(岡山県備前市)」とともに、「近世日本の教育遺産群—学ぶ心・礼節の本源—」として、「日本遺産(Japan Heritage)」に登録された。教育史の重要性は近年、広く着目されているところであり、新しい歴史像の中で必要不可欠のものである。

淡窓研究会事務局長としては、きちんとした回答を求める。ただし「当会提案の用語精選案とアンケートに関してよくあるご質問」(http://www.kodairen.u-ryukyu.ac.jp/new/new_94_faq.html)の「Q6. 「歴史系用語精選の提案(第一次)」における用語精選の基準を教えてください。なぜ、坂本龍馬や上杉謙信は対象外となったのでしょうか」において、

なお、この案は、今後のアンケート結果などを参考にして、最終案を作る過程にありますので、現時点では個別の用語の判断理由については回答を差し控させていただきます。

と述べている。「現時点では…(略)…回答を差し控えていただきます」ということは、「最終案」作成に至るどこかの時点では、「用語精選の基準」を明確にすることなのだろうか。

- 13 「南京大虐殺」高校用語提案の歴史教育研、20人超が教科書執筆・編集」（「zakuzak by 夕刊フジ」2017. 12. 16、<http://www.zakzak.co.jp/soc/news/171216/soc1712160005-n1.html>）は、「高校歴史教科書の執筆者や編集協力者20人以上が呼びかけ人などとして参加していること」を報道し、「研究会の油井会長は『提案を尊重するかどうかは教科書会社と執筆者次第で、当会が直接的な影響力を行使できるものではない。問題の中心は広汎な方々に了解される精選を明確にすることであり、特定の史観に基づいて用語精選をするものではない』とコメントした」と報じている。この油井大三元氏の見解は桃木氏の見解を補強するものと解される。ここで「問題の中心」を「広汎な方々に了解される精選を明確にすること」としていることは重要である。「広汎な方々に了解される」ためには、個々の用語を精選した根拠を具体的に示して了解を求めなければならないのではないかと。またここで注視すべきことの一つは「当会が直接的な影響力を行使できるものではない」としていることで、「間接的な影響力」を行使しようとしているということである。教科書執筆者の多くを取り込み、間接的に教科書叙述をコントロールしようとしているということである。注目すべきもう一つの点は「特定の史観に基づいて用語精選をするものではない」としていることである。油井氏の主観では「特定の史観」には基づいてはいないということであろう。しかし独自の基準を有していることを言わない。こうした批判を受けている以上、独自の基準を明らかにするべきである。これまでシンポジウムなどの場で、何回か油井氏に質問してきた感想は、まともに答えず、理想と情熱と責任感とを述べる方だということである。特に気になるのは、歴史教育の国民のナショナル=アイデンティティ形成に関する機能に対する油井氏の理解のなさである。拙評「高校の歴史教育は何を「期待」されているのか—日本学術会議史学委員会高校歴史教育に関する分科会提言「歴史総合」に期待されるもの」に対する疑念—」（『教育社会史史料研究』11、2017. 3）に「附記」して、日本歴史学協会・日本学術会議史学委員会高校歴史教育分科会主催歴史教育シンポジウム「歴史総合」をめぐって」（於駒澤大学、2016. 10. 22）に参加して、若干の質疑と意見交換をした概要を記しておいた。そこでは「アイデンティティの育成に関する考えを問うた。回答は、民族教育・日本中心の教育はあり得ない、というものであった。評者は根拠のない日本賛美に賛成しないが、ナショナル=アイデンティティの育成に配慮しない歴史教育の主張には啞然とせざるをえない」と記している。こうした歴史教育観を含めた広い意味での史観を開示せず、「特定の史観に基づいて用語精選をするものではない」というのは、インタビューという性格からやむを得ない点があるかもしれないが、どこかできちんと明確にし、その上でアンケートで見解を求めべきである。
- 14 各国の教科書をみると、様々な形式のものがあるようである。そうした多様な形式は、授業の形式・内容と目標から導き出されるものである。日本の歴史教科書は、系統的叙述を重視してきた。そうした観点から言えば、幹に相当する本文を簡略にして、枝葉に相当する「資料・図表やコラムなど」を重くしてもバランスを欠くばかりではないかと案ずる。実は、こうした方向性に、警鐘を鳴らした指摘がある。インターネットのwhomoro氏の「公開シンポジウム 高校世界史教科書記述・再考 研究者の視点から」（於立教大学、2015. 3. 4）の参観記である「世界史教育と教科書・研究者〈シンポジウムが映し出したもの〉」は「◇教科書におけるコラムについては全く話題に上りませんでした。考えておく必要があります。貴堂さんが関わっている実教出版の「世界史B」や桃木さんが関わっている帝国書院の「新詳世界史B」は、非常にコラムの多い教科書です。コラムで本文の内容を補足するという意図は理解できますし、コラムを読むことによって多角的に歴史を見るのができるようになるとは思います。／◇しかし私は、コラムを増やすよりも、本文そのものを改善・充実させてほしいと考えています。何よりも、学習する生徒たちの立場に立って考えてみなければなりません。というのは、本文の内容とコラムの内容を関連させてトータルに理解するためには、かなりの力が要求されるからです。多くの生徒たちにとっては、コラムが多過ぎると、歴史の大きな流れをつかみづらくなってしまいます。また、新しい見方をコラムで載せていくという編集方針をとると、本文の内容が古いまま残っていくということになりかねません。（実教の教科書にはそのような傾向が見られます。）コラムの位置づけについては、今後十分な検討が必要だと思えます」（「世界史の扉をあけると」2015. 3. 5、<http://d.hatena.ne.jp/whomoro/20150305/1425549326>）と述べている。評者はこの指摘は極めて妥当とみる。評者は「教科書の資料・図表やコラムなどに掲載することを否定してはいない」という発言は、あまりにも無責任な発言と思う。叙述せず、用語だけを弄っていることの弊害であり、授業と叙述のバランスを検討して、論じなければならないこととみる。
- 15 「日本史」ではできると思う。しかし「世界史」では難しいと見る。「日本史」は、研究領域と教育領域とが緩やかに連続しているのに対して、「世界史」は民学的伝統を有している。教科教育史的に科目の独自性と限界性とを踏まえて論じなければ、地に足のついた論にならないと思う。評者の日本史と世界史の質の違いに関する基本的考え方は、拙評「世界史教育の断末魔の悲鳴が聞こえる—日本学術会議「提言」「再提言」の諸問題と疑念を中心に—」（『教育社会史史料研究会』8、2015）註42ならびに拙評「歴史的思考力」を「道具（ツール）」とする理論と実践の課題—永松靖典編『歴史的思考力を育てる—歴史学習のアクティブ・ラーニング—』の「資料」の扱い方を中心に—」（『教育社会史

料研究』12、2017)を参照願いたい。

- 16 「21年開始 共通テスト試行調査問題公表」に関する『朝日新聞』(2017.12.06)は、1面トップの見出しを「脱・暗記 考える大学入試 複数資料読み解き・自ら数式組み立て」とする。2面の「視点」欄は「思考力 問えているか 情報処理力 評価の可能性」とする。39面「今の授業じゃ解けない 面食らう生徒 対策悩む教員」とする。刺激的な見出しであるが「世界史」などは慣れの問題のようにも感じる。分量が多くて、体力勝負か。国語力があれば解けるような問題もあり、歴史としてはやや薄味にも感じた。こうした問題に対応するためには、様々な史資料を読解する視点を加味する必用はありそうに感じた。評者は史資料と格闘してきたので、どちらかという面白そうである。問題は生徒が着いてこれるような工夫ではないか。授業の組み立て、ポイントを少し弄る必用がありそうに感じた。また、出題者はかなり無理しているのではなだろうか。こうした出題が私大にまで広がるものかどうか。動向を注視したい。またこうした出題にすると、歴史系科目を「考える楽しさを味わえる科目」になると考えているのか、見解をうかがいたいものである。
- 17 マーガレット・マクミラン著、真壁広道訳『誘惑する歴史—誤用・濫用・利用の実例—』(えにし書房、2014)は、「おそらく、歴史家は科学や社会科学の分野における特権階級のように思われたいと望んでいるがために、特化した言語や長く複雑なセンテンスに向かって突き進んでしまうのだろう。書いていることの多くは不必要に難しくなっていることが多い」(第3章 過去は誰のものか p.37)と述べる。桃木氏の新たに「暗記」することを求めている「概念用語」に当てはまる指摘のように思われる。またマクミラン氏は「悪い歴史は、十分に証拠がないのに包括的な一般化を行ったり、不都合な事実を無視したりする」(同 p.37)とも述べている。歴史は、個性探求の学であり、特に実証的な歴史研究者は、概念化や一般化に慎重である。またマクミラン氏は「さらに歴史家は、社会学や文化史のために政治史を見捨ててはならない。好むと好まざるとに関わらず、政治は私たちの社会や生活にとって重要である」(同 p.40)と見解を表明し、社会史の「面白い」ことを認めつつ、ランゲを尊重することを求める。そして「…(略)…過去の物語には減じることのできない芯が存在している。すなわち、何が起こったのか、どの順番で起こったのかということである。偶然と結果は過去を理解するうえで決定的である」(同 p.41)と述べ、ナポレオンのワーテルローの戦いを例に挙げて論じている。この例のように「芯」とは個別具体的な出来事であるべきであろう。評者も「過去の物語」すなわち歴史には「芯」があるべきであり、歴史教育においては、歴史の「芯」をきちんと取り上げていくべきであろうと考える。今回の「精選の提案」においては、「基軸的な用語(概念用語)」を説明するものとして「用語」を選定するために、歴史の「芯」をどのように押さえるかという観点を欠落しているように感じる。
- 18 WGのメンバーには、小川幸司氏の名は見えず、矢部正明氏の名が見える。
- 19 「精選の提案」は、「用語精選の過程を明確にするために、従来の教科書に出ているすべての用語を打ち込んだエクセル・ファイルを土台にして作業をしてきた経過の一部を附録として末尾に掲載しました。」という。作業ファイルは世界史・日本史各1件掲載されている。このうち、前者にはコメントが付され判断の一端を窺わせている。評者は、こうした形でも示せるのであるから、とりあえず、すべて示すべきだと思う。評者のみるところでは「第一次」は、こういう基準に基づいて、このように判断した。アンケートではこういう意見を出された。この点を考えて、最終案では、このように判断した、というようにするべきものではないのだろうか。評者は前掲拙評「世界史教育の断末魔の悲鳴が聞こえる」において、油井大三郎現高大连携歴史教育研究会会長を代表とする高等学校歴史教育研究会の2014.6末—8末の2ヶ月間にわたって、学術会議歴史教育分科会、日本歴史学協会特別委員会の協力でおこなったアンケートについて、極めて問題の多いことを指摘した。今回もアンケートを自己の正当化のために利用としているように見える。「世界史教育の断末魔の悲鳴が聞こえる」註58では、

油井大三郎を代表とする高等学校歴史教育研究会は、2014.6末—8末の2ヶ月間、学術会議歴史教育分科会、日本歴史学協会特別委員会の協力でアンケートを実施し、9.30付けで「歴史教育における高等学校・大学間接続の抜本的改革—アンケート結果と改革の提案—」を出した。このアンケートを通して「現場教員」の実態を分析し、「提言」を見直すというのなら、わからないではないが、通り一遍の分析をして「高等学校歴史教育研究会の改革提言」なるものを出した。この「改革提言」では、呆れることに「アンケート結果から明らかとなり、大学入試が高校の歴史教育に大きな否定的影響を与えていることが明らかになった」と断言するのである。それならば大学入試から歴史を外せば済むことである。あまりにもお粗末な提言ではないか。「代表油井大三郎」名の「はじめに」では、「Vの「高等学校歴史教育研究会の改革提言」をとりまとめ、関連団体での検討材料としていただきたいと思います」と述べる。アンケートは、考える切っ掛けでしかない。アンケートを踏まえて、関連団体での検討を経て、しっかりした提言をすべきなのに、「アンケート結果」から何もすべて明らかになったかの如く明解に結論に結びつける。こうした手法を信ずることは、後世に禍根を残す。評者は社会調査の専門家ではないので、判然としない点を有すが、設問により回答が誘導されている。「現在の高校歴史教育が抱える問題点をどうお考えですか」と問われ「大学入試への対応に追われていること」と設問されたら、

「追われていない」と回答する者が少ないのは当然である。「大学入試の影響で用語の暗記中心の授業形態になっていること」という設問も同様で「なっていない」と回答する者が少なくなるのは当然である。こうした恣意的な(恣意でないとするれば杜撰な)アンケートを通して「アンケート結果から明らかとなり、大学入試が高校の歴史教育に大きな否定的影響を与えていることが明らかになった」と断じるのは、あまりにも恣意的である。そもそもアンケートの対象が不明瞭であり、「全国の大学の歴史系学科、学会、高等学校教員による歴史系の研究会に送付」したというが、評者には送付されず、調査対象が恣意的に選択されている可能性を排除できない。恣意的でないとしても、偶々こういう結果になった、という程度の意味しかもたない。しっかりした統計学の専門家に、このアンケートと提言の妥当性を検討していただくべきだと考える。〔近藤一成2013.3〕は、早稲田大学文学部入試における歴史廃止・論述導入の経緯を回顧して「統計学に暗い報告者には、…(略)…結論は明解であった」(p.78)として後悔の念を表明している。油井等がこのアンケートを、恣意的に用いないよう、監視すべきである。

と批判した。今回のアンケートも同様の問題を内包していると考える。「皆さまへのお願い」(「高大連携歴史教育研究会」ブログ、2017.11.16、<http://kodairekikyo.blogspot.jp>)は、何を批判されているのか理解していないようで、「刺激的な報道」を受けて、「大学入試で出題される「基礎用語」で、他の用語を「発展用語」として掲載することを否定するものではありません」と述べる。その上で

ようやく歴史が「暗記科目」というイメージを一新し、「考える楽しみを味わえる科目」に転換するチャンスがやってきました。「生物」は2000語から500語に圧縮する大胆な用語精選を発表しています。「歴史」では11月10日に文科省にゆき、アンケート調査の開始と用語精選第一次案の説明をしてきましたが、どの位のアンケートが集まるか注目している模様でした。是非、周囲の多くの方々に働きかけて、回答数を増やせるようにご協力ください。

再度、強調します。「歴史」を「暗記科目」から「思考力育成型科目」に転換させる最大のチャンスです。

と呼びかける。かつての「暗記科目」批判の「夢よもう一度」といったところなのだろう。かつてのアンケート同様のやり方は首肯しがたい。ここではさらに、「生物」もやっているからという、他者に批判を転化する言い訳をしている。他者がやっていれば許されるのか、よく考えてほしい。また文科省の「注目」を理由として、アンケートの回答数を増やすよう呼びかけている。本音であろう。アンケートと請願署名とを勘違いしているのではないだろうか。

- 20 評者の見解は、基本的に、拙評「世界史教育の断末魔の悲鳴が聞こえる—日本学術会議「提言」「再提言」の諸問題と疑念を中心に—」(『教育社会史史料研究』8、2014)に記している。その後の関連する批評は『教育社会史史料研究』誌に収録している。また評者の「世界史」未履修問題発覚当時の基本的な見解は、拙稿「『世界史逃れ』をどのように考えるか—新聞報道にみる『世界史』教育の現状と課題—」(『総合歴史教育』42、2016.12)参照。

「精選」に名を借りた新たな「暗記」用語の提案の問題点(鈴木)